

森羅万象から情報を引き出して理解する頭脳活動で、整理は既知の知識との整合をとるために不可欠なプロセスだ。すでに自分が持っている知識体系、そして人類の知識体系に合理的にマッチさせて理解する。そのためには認識した複雑多岐にわたる事柄を、既存の分類様式に整頓し、体系づけなければならぬ。

「分類」とは要素の似たもの同士を類に分けまとめることで「類別」とは違って体系化する。全体を似たもの同士で大きく分け、分けたものをさらに共通性に従って細分する。これ以上分けられない最小要素である個の一つ手前の種にまで分けて段階づける。

サイエンスでは、知識は個人の思いなしとはしゅん別される。思いなしのレベルでは、ものごとの要素群を正確に見極めて、それらの相互作用で全体が動いて

認識した事柄、分類し体系化

いるという適切な判断はできない。思いなしが知識にまで高まるには、それが無矛盾・確実で、だれにも認められることが必要だ。

サイエンスの先駆者、13世紀の英国のベーコン、17世紀のフランスのデカルト以来の近代哲学では近代科学の進展に伴い、知ることのあり方や、それが人間の知的活動に占める位置について様々な角度から検討された。近代科学の知識のあり方を分析したドイツのカントは「信仰に場所をあげるために知識を制限せざるをえなかった」といった。そこに、ものごとへの支配力をもつ知識を万能のものとはしないで、信仰・信念・知恵の働きに配慮した、見事な謙虚さをみる。すぐれたサイエンティストは、その能力限界を正しくわきまえているのだ。

(東京大学名誉教授 和田昭允)

日経産業新聞
平成 30 年
11 月 27 日

認識の基本について2つの考え方があがる。経験論は、全ての観念は個人が生まれてからの経験から生ずるとして、「生まれつき」と表現される生得観念を否定する。合理論は、真の認識は経験に基づかない。つまり、人間が生来持っている理性的なものだとする。それぞれの発祥地から、イギリス経験論と大陸合理論とよばれる。

これらの背景には「ア・プリオリ」と「ア・ポストエリオリ」という、2つの推論スタイルを対にして考える中世スコラ哲学がある。推理方式として、一般から特殊を導く「演繹(えんえき)的推理」と個々の特殊な経験から一般を導く「帰納的推理」とが対をなしているのだ。

ア・プリオリとは「より先なるものから」という本来的の意味で、一般から特殊を導く「演繹的推理」

科学の転換期に決定的役割

だ。本来的に存在する一般の対概念は、新たな認識法則から、個々の問題を解論的課題として登場した。決する。たとえば、ニュートンの万有引力の法則から、小惑星探査機「はやぶさ」の軌道を計算し、小惑星イトカワに無事着陸させるシナリオがそれだ。

一方、ア・ポストエリオリもいえる理論体系を築くは「より後なるものから」た。経験を送る「感性」と、経験に基づくことを意図する「理性」と、味する。多くの特殊な経験の間、認識の要素となるから一般を導く「帰納的推理」であり、個々の事例を総合して一般法則を発見する。たとえば、チコ・ブラーエが詳細に測定した諸惑星の運動から、ケプラーが惑星運動の法則性を明らかにし、ニュートンが万有引力の法則を発見した。

近代サイエンスの登場により、人間の認識の基盤がどのようであるかの研究が盛んになった。そしてニュートン物理学の基本概念を頭に置きながら、このア・プリオリとア・ポストエリオリ

の知のあり方についての反省に基づく学問の転換期にあって、決定的な役割をはたしたのである。

(東京大学名誉教授 和田昭允)

日経産業新聞
平成 30 年
12 月 4 日